岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第7号（2022）67 － 86

大学における英語科目設計の改善に向けて―
学習動機に関するアンケート調査の報告

寺西　雅子・劔持　淑・荻野 勝・大年 順子・伊野 英男

Toward Improving the Design of English Courses at University: A Report on a Survey of Learning Motives

TERANISHI Masako, KENMOTSU Yoshi, OGINO Masaru, OTOSHI Junko, INO Hideo

要旨

2025 年には新しい学習指導要領で学んだ学生が大学に入学してくる。大学の英語教育プログラムに関しても、将来を見据えたプログラムや科目設計の検討が必要であろう。岡山大学では、これまで、いわゆる一般科目として開講されている１、２年生対象の必修科目に関しては、度重なるカリキュラム変更が行われてきた。そこで今回は、現行カリキュラムの中で 1 年生から 6 年生を対象として開講されている選択科目「上級英語」の検討を目的として、2021 年 9 月に全学生を対象に、英語学習の動機に関するアンケート調査を実施した。本稿では、学生の英語学習の理由や目的に関して、全体傾向を把握するとともに学部や学科ごとの特徴についてアンケート結果をもとに報告する。

キーワード 英語科目設計、学習動機、道具的動機、統合的動機、アンケート調査

1. はじめに

岡山大学の英語教育に関しては、これまで 1、2 年生を対象とする必修科目は、度重なるカリキュラム改革が行われてきた。[1]しかしながら、1 年生から 6 年生まで履修が可能となっている選択科目については、その都度、状況に応じての小規模な変更はあったものの、長期間にわたって大きな見直しは行われていない。また、グローバル化する社会において活躍することが期待される現在の大学生には高い英語力を身に付けることが求められているにも関わらず、多くの日本の大学生にとって入学時に獲得していた英語力の維持すらおぼつかないというのが現状である。[2]そこで、現在のカリキュラムの中で全学年を対象として設置されている選択科目の改善を図ることを目的として、学習動機に関する学生へのアンケート調査を実施した。本稿では、学生の英語学習の理由や目的に関して、全体の傾向を把握するとともに学部や学科ごとの特徴についてアンケート結果をもとに報告する。

2. アンケート調査の実施

今回のアンケート調査では、大学生の英語学習の動機、すなわち英語力の向上を目指す理

由や目的についての質問をした。以下に、アンケート調査実施の詳細とアンケート項目について説明する。

2.1　実施時期、実施方法および実施対象者

2021 年 6 月から 7 月にかけて全学部生を対象に一斉メールを送付して、Google フォームで作成したアンケートに回答するよう依頼した。回答者数は、904 名であった。学年の内訳は、1 年生 401 人、2 年生 255 人、3 年生 112 人、4 年生 89 人、5・6 年生 6 人であった。

2.2　アンケート項目について

アンケート項目は、事前にパイロット調査を実施して作成した。パイロット調査は、筆者が担当する授業の履修者に対して Google フォームを用いて実施し、英語学習の動機を自由記述の形式で書いてもらった。回答は 150 名から得られ、記述された内容を整理して、以下の 9 項目を設定した。

1. 留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい
2. 就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい
3. 大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい
4. 専門分野の学術論文が読めるようになりたい
5. 専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい
6. 海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい
7. 卒業要件を満たすため
8. 単位取得のみのため
9. その他

アンケートの質問は、「英語力向上を目指す動機について当てはまるものを選んでください。」とし、9 つの項目から複数回答可とした。

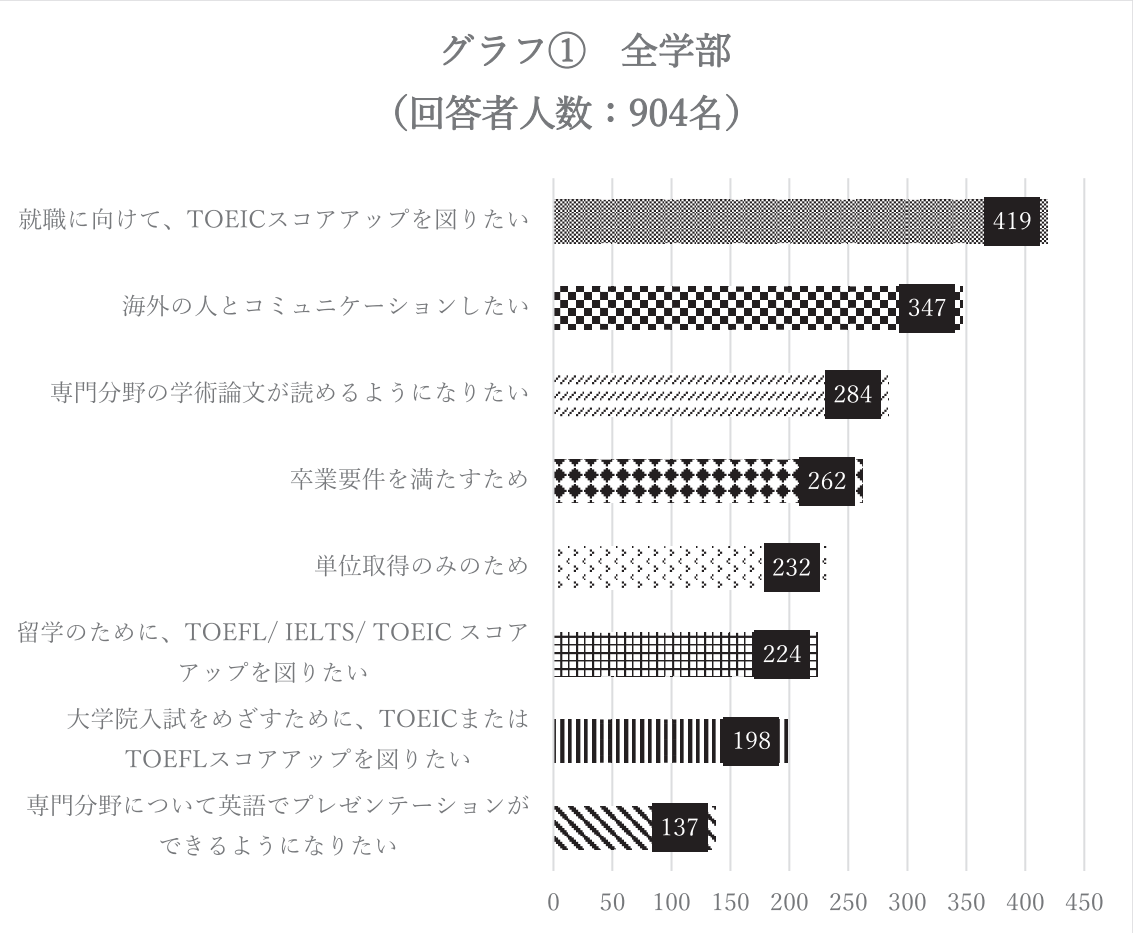
3.　アンケート結果

全学部の結果と、学部あるいは学科や専攻ごとの結果に分けて報告する。

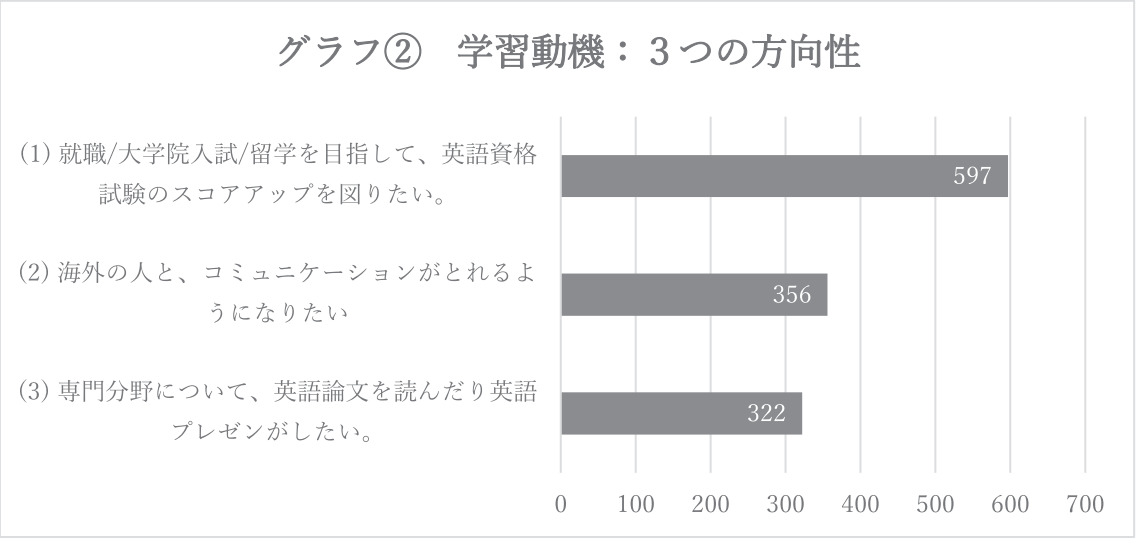
3.1 全学部の結果

2.2 で示した 9 項目のうち、1～8 項目についてのべ人数を集計した（グラフ①参照）。全学部の回答者 904 名のうち、最も多かったのは、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」419 名(46%)で、2 番目は「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」347 名(38%)、3 番目は「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」284 名

(31%)であった。



英語学習の動機について大学としての全体像をつかむために、1～8 項目をその内容によって大きく３つの方向性に分類した。（グラフ②参照）３つの方向性とは、(1) 就職/大学院入試/留学を目指して、英語資格試験のスコアアップを図りたい、(2)海外の人とコミュニケーションがとれるようになりたい、(3)専門分野について、英語論文を読んだり英語プレゼンがしたい、である。(1)の、就職や進学のために英語資格試験のスコアアップを希望している学生が 597 名（約 66%）、(2)の、英語コミュニケーション力の向上を希望している学生が 356 名（約 39%）、(3)の、専門分野における英語力の向上を希望する学生が 322 名(約 36%)であった。なお、それぞれの分類においての人数は、実数である。



(1)のように、職業や進学のための資格試験を学習目的とするのは「道具的オリエンテーション」と呼ばれる実利的な道具的動機で、全学生の７割近い学生が回答した。一方、(2)のように、目標言語話者への友好的態度を示す傾向は統合的動機であり、全学生の約４割が回答した。日本で英語学習をする場合、英語話者との接触が少ない環境にいるため、(1)の道具的動機が(2)の統合的動機を大きく上回るのは当然であると言えるだろう。また、(1)の動機を選択した学生597名のうち241名（40%）が(2)の動機も選択している。[3]（1)と(2)の動機の相互作用は高いと考えられる。すなわち、高校時代より行動範囲の広くなった大学生が、(1)の動機をもって（様々な就職や進路を目指して）英語での活動を体験し、英語で行動する機会が増えるにつれて、実際に話す相手や状況を具体的に意識できるようになり、(2)のコミュニケーションをしたいという統合的動機付けは高まっていくと考えられるからである。[4]

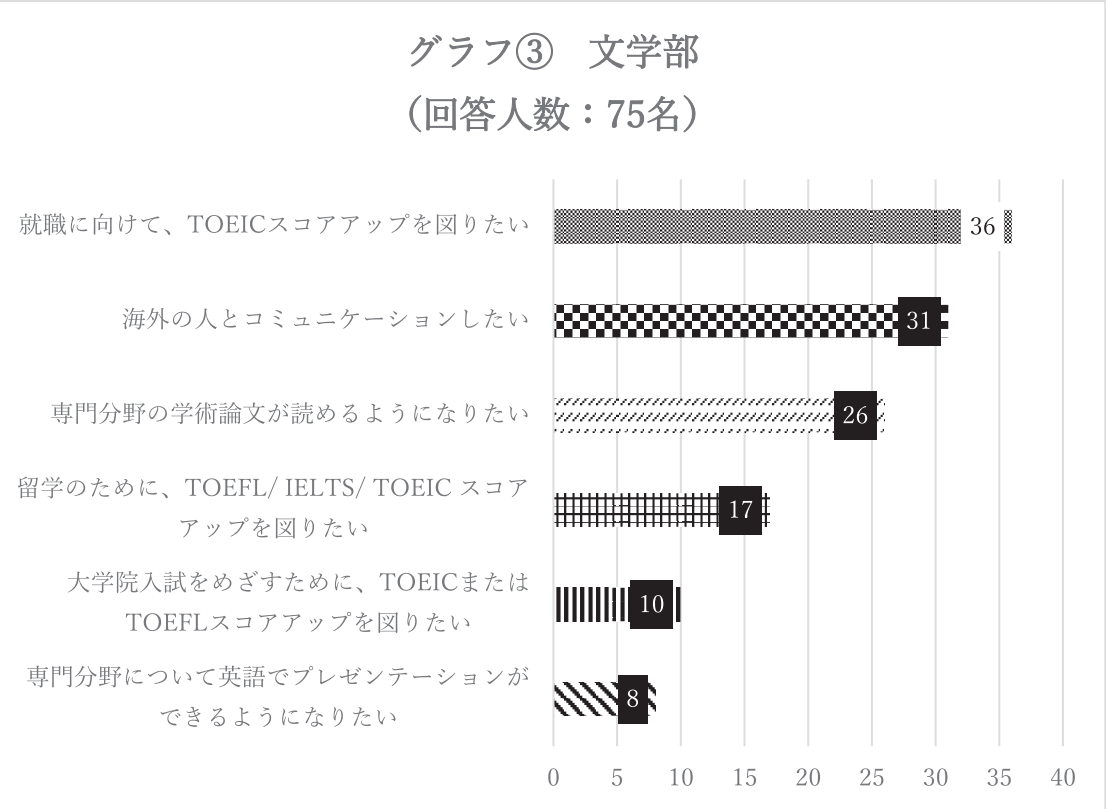
また、(3)の専門分野における英語での活動に関しても、4 割近い学生が英語学習の動機であるとしている。各学生が学ぶ専門性にその傾向は左右されやすく、次セクションに示す学部や学科ごとの結果にその特徴が表れている。これは高年次におけるゼミ室での活動内容や、大学院進学の状況とも深く関連しており、学生を取り巻く学内の研究活動という環境的要因の影響を受けるものと考えられる。

3.2 学部ごとの結果

次に学部ごとに分けてアンケート結果を示す。学部の状況によって異なる傾向を把握するとともに全体の傾向に反映されにくい学部学科独自の特徴に注目したい。以下の学部ごとの結果では、傾向や特徴をわかりやすく示すために項目を絞り、「卒業要件のため」、「単位取得のみのため」の消極的なニーズを表す２項目を除いて、１～6の項目について集計してグラフを作成した。

3.2.1　文学部

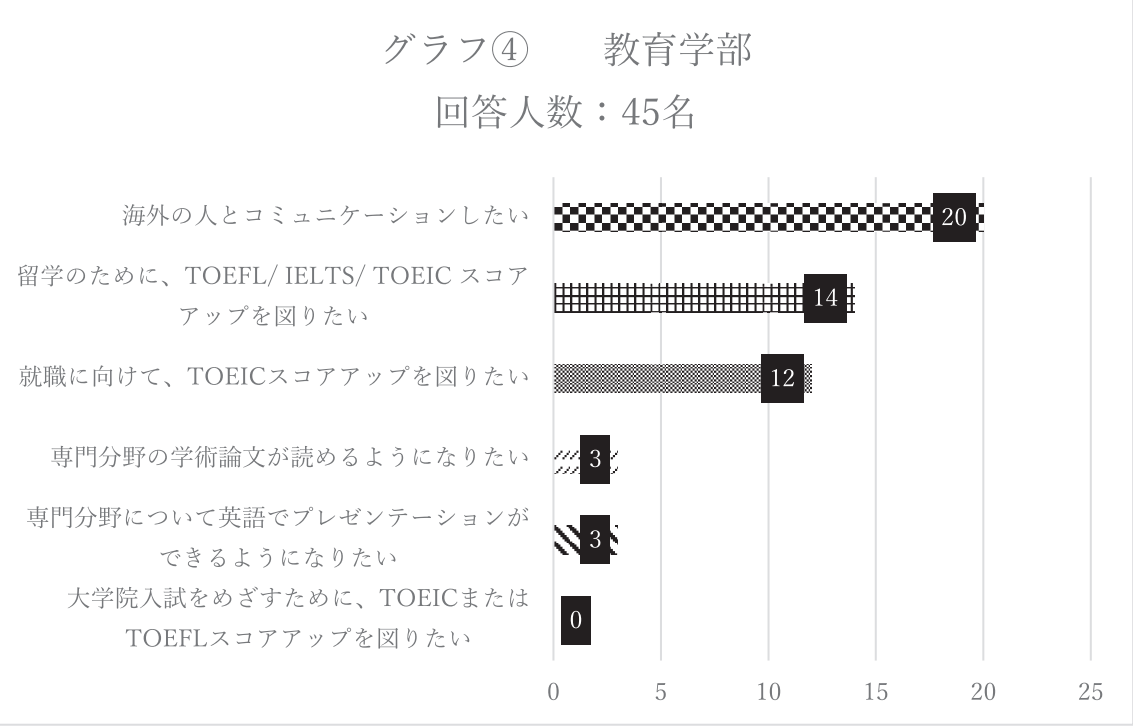
文学部の回答者は 75 名であった。（グラフ③参照）「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」36 名（48%）、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」31 名（41%）、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」26 名（35%）の順に多く、全学部の傾向とおよそ同じである。続いて、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」17 名（23%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」10 名（13%）、となっており、一定数の割合で留学や大学院入試を目指して英語学習をする学生がいることがわかる。



3.2.2　教育学部

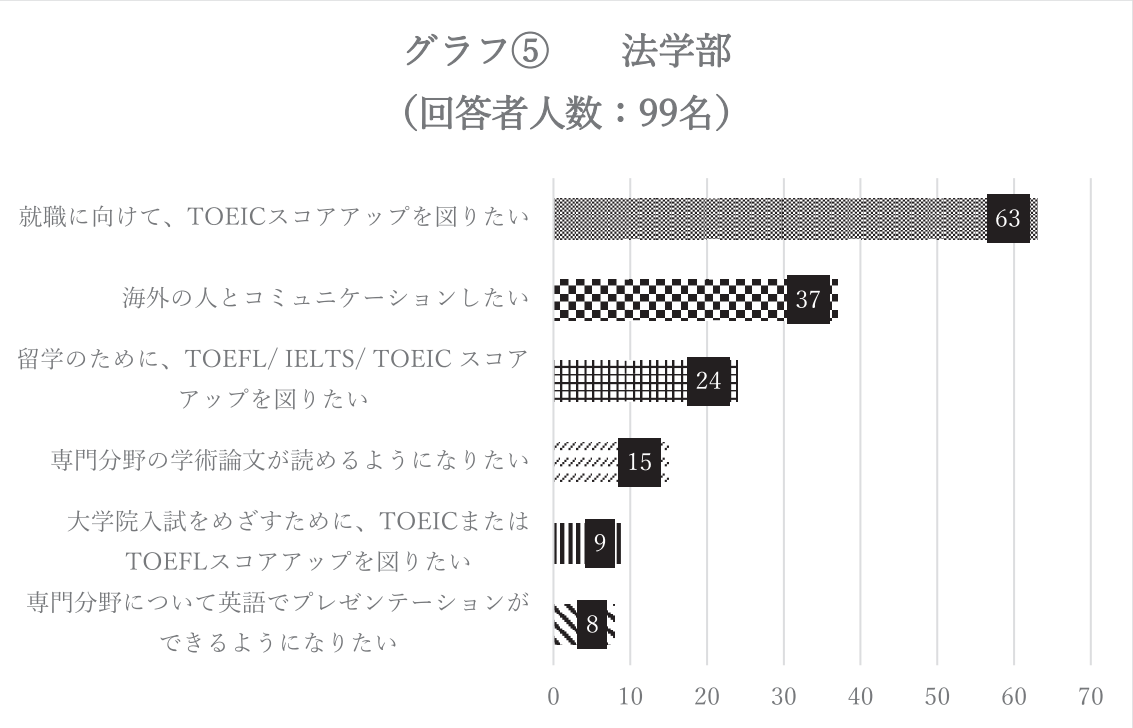
教育学部の回答者は 45 名であった。（グラフ④参照）「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」20 名（44%）、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」14 名（31%）、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」12 名（27%）の順に多く、全学部の傾向とは異なって、就職のための TOEIC スコアアップよりも、コミュニケーション力の向上を希望する学生や留学を目指して英語力アップを図りたい学生の割合が多かった。また。専門分野についての英語力向上を目指す学生の割合は低

く（3 名：6%）、大学院入試を目指して英語学習をすると回答した学生はいなかった。



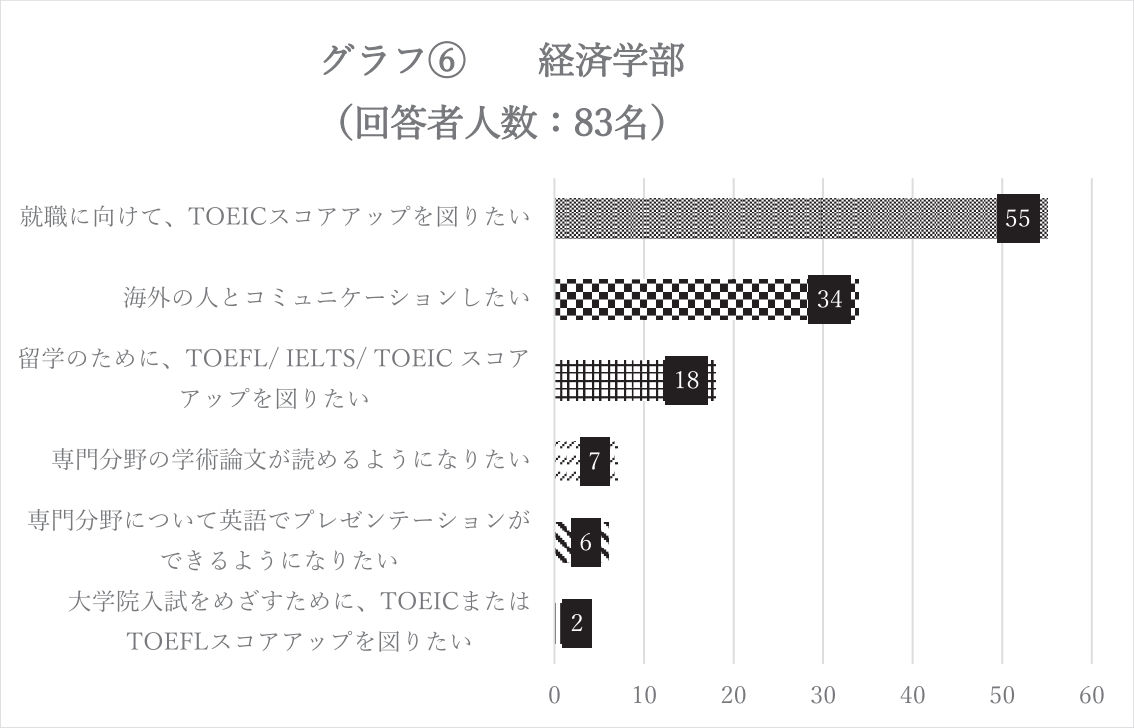
3.2.3　法学部

法学部の回答者は 99 名であった。（グラフ⑤参照）まず、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」63 名（64%）が突出して高いことがわかる。次に「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」37 名（37%）、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」24 名（23%）と続く。「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」15 名（15%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」9 名（9%）、「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」8 名（8%）と一定数の割合の学生がいることがわかる。



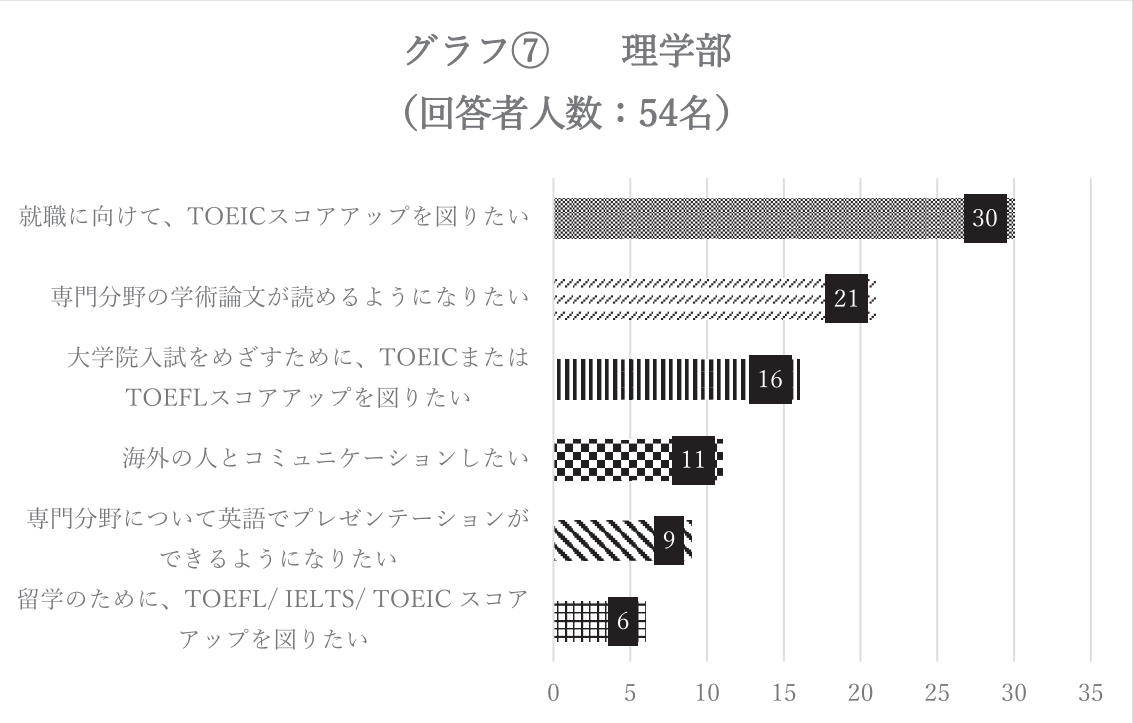
3.2.4　経済学部

経済学部の回答者は 83 名であった。（グラフ⑥参照）まず法学部と同様に、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」55 名（66%）が突出して高いことがわかる。これは、全学部で最も高い。次に「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」34 名（40%）、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」18 名（22%）と続き、法学部においての傾向とよく似ている。続いて「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」7 名（8%）、「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」6 名（7%）と専門分野を意識している学生は多くないようである。また「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」2 名（2%）と法学部よりも低い。



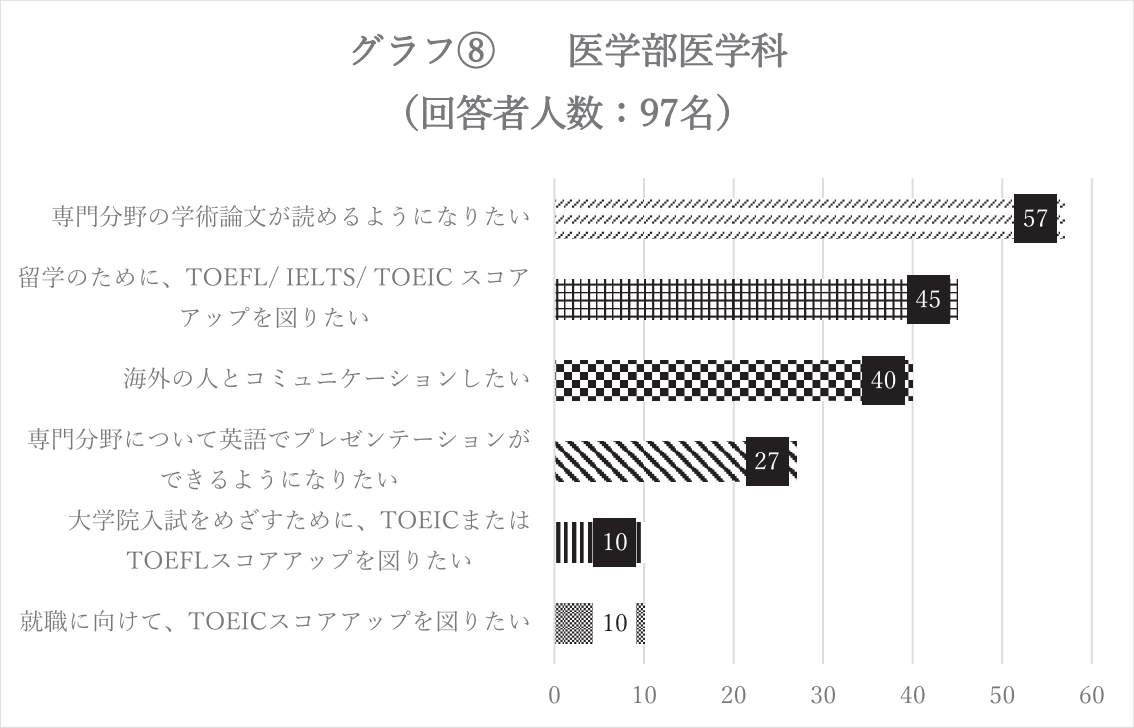
3.2.5　理学部

理学部の回答者は 54 名であった。（グラフ⑦参照）「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」30 名（55%）の割合は全体の傾向より高い。これは、工学部、農学部とも共通する。また先に見た文系学部とは異なって、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」21 名（39%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」16 名（30%）が多くなり、一方、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」11 名（20%）の割合が全学部や他の理系学部とも比較して低くなっている。また「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」6 名（11%）、も少ないことがわかる。



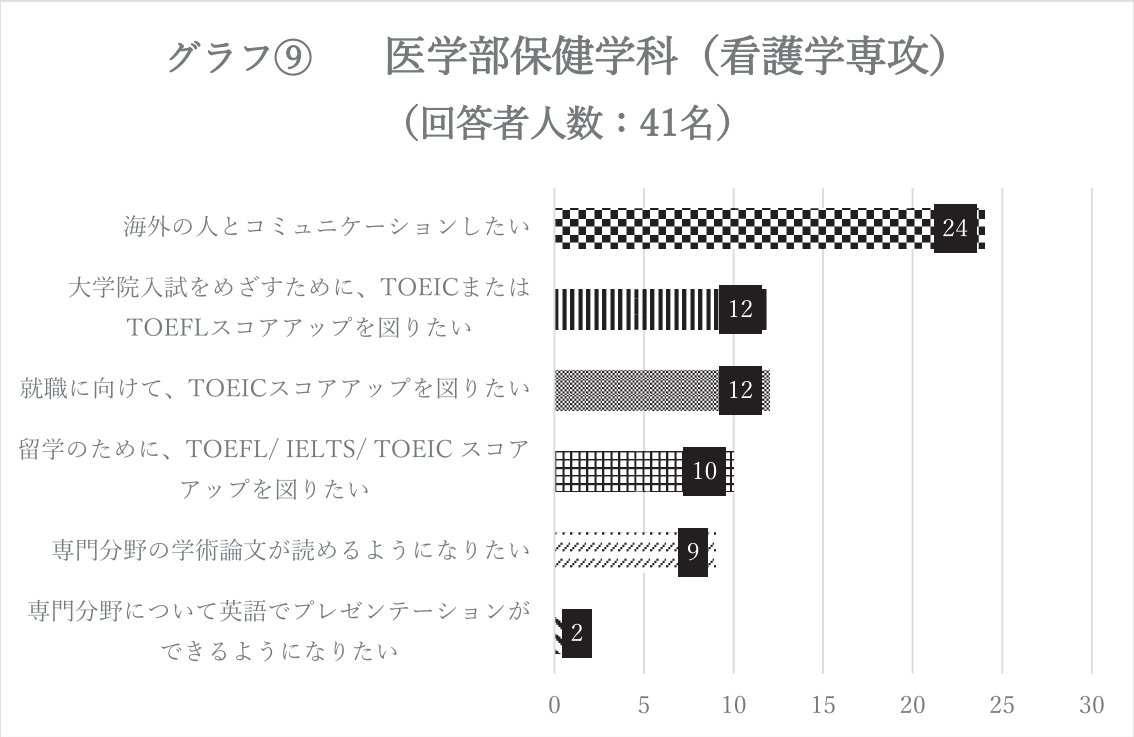
3.2.6　医学部医学科

医学部医学科の回答者は 97 名であった。（グラフ⑧参照）まず「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」57 名（59%）が最も多く、この特徴は薬学部と歯学部にも見られ、医療系学部に共通している。また 2 番目には「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」45 名（46%）が多くなっており、これには本学で実施するアメリカでの医療インターンシッププログラムの選考基準に TOEIC スコアが利用されていることが影響しているのではないかと考えられる。続いて「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」40 名（41%）も全学部の中では高い割合である。続いて、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」10 名（10%）、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」10 名（10%）は少ない。

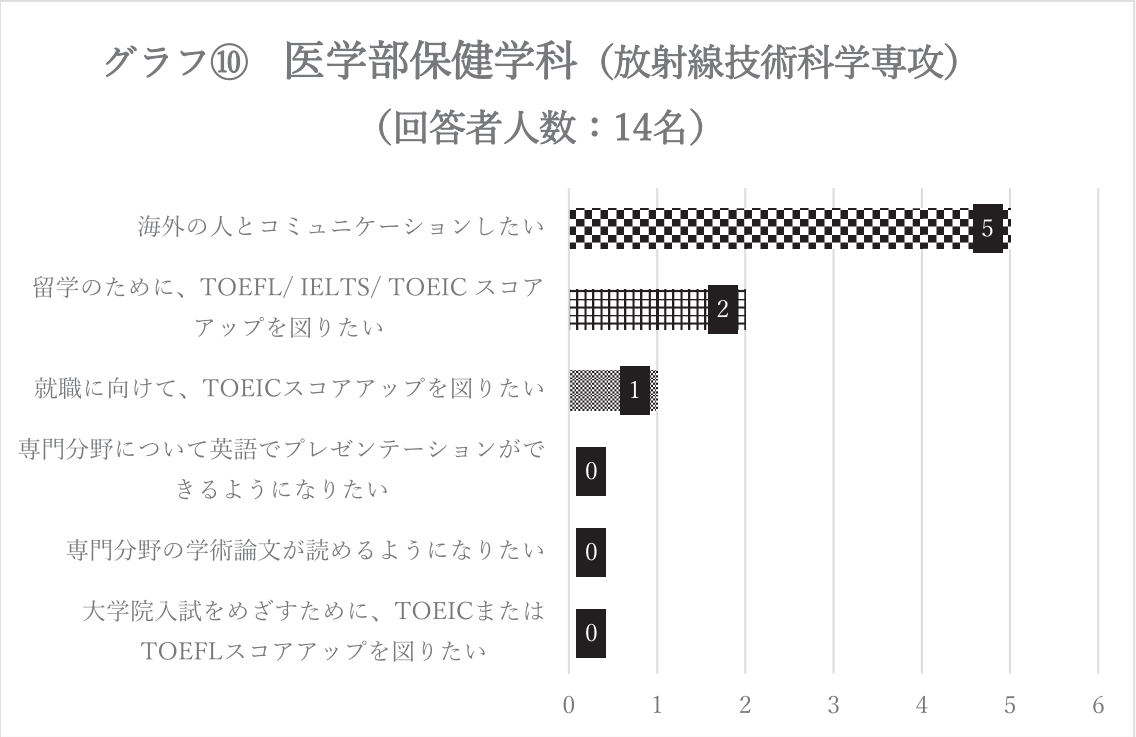


3.2.7　医学部保健学科

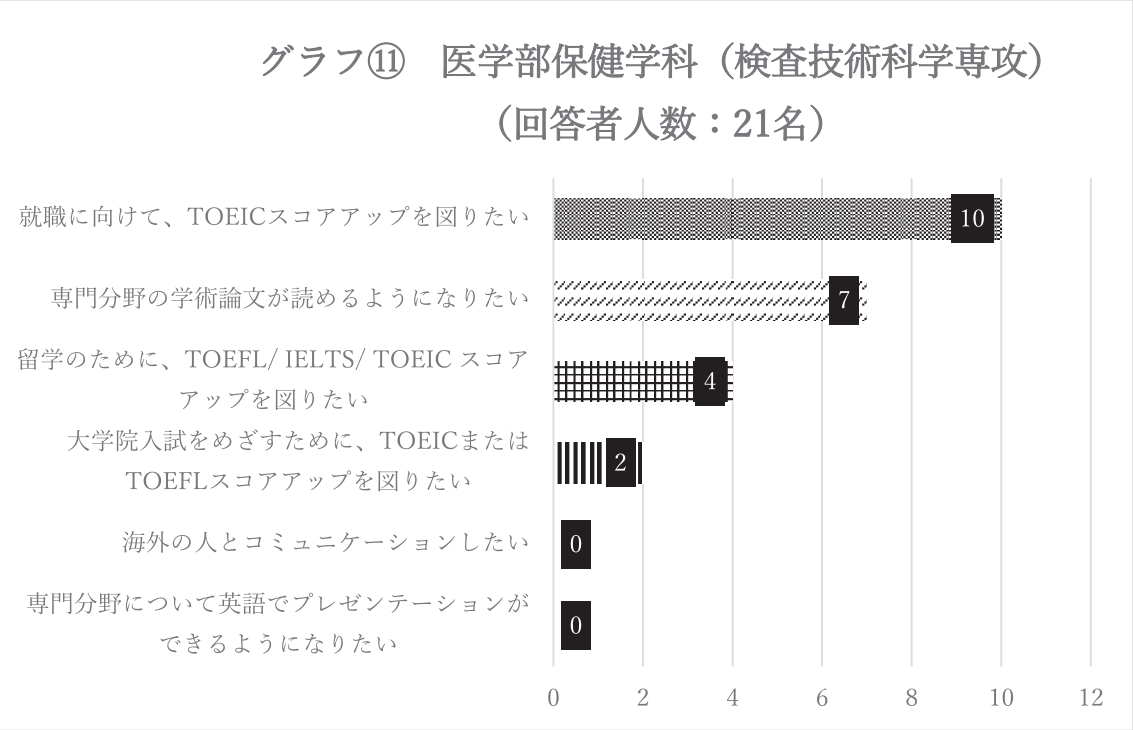
医学部保健学科には３つの専攻があり、回答者数（母数）が小さくなるが、それぞれの専攻の特徴を捉えることを優先して専攻ごとの集計を行った。看護学専攻の回答者は 41 名であった。(グラフ⑨参照) まず、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」24 名（59%）が非常に高いことが特徴である。続いて「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」12 名（29%）、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」12 名（29%）が多い。また「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」10 名 (24%)、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」9 名 (22%) とそれぞれの項目に、一定数の回答があり、英語学習への意欲（ニーズ）が、その他２つの専攻よりも高いようである。



放射線技術科学専攻の回答者は 14 名であった。（グラフ⑩参照）看護学専攻と同じく、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」5 名(36%)が最も多い。看護学専攻とは異なって、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」2 名（14%）、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」1 名（７%）を回答した学生は少ない。また「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」の回答者はいなかった。グラフには、のべ人数を示したにも関わらず、各項目の合計が回答者人数より少ないのは、集計の際に除いた「卒業要件を満たすため」7 名（50%）「単位取得のみ」5 名（36%）が多かったためである。

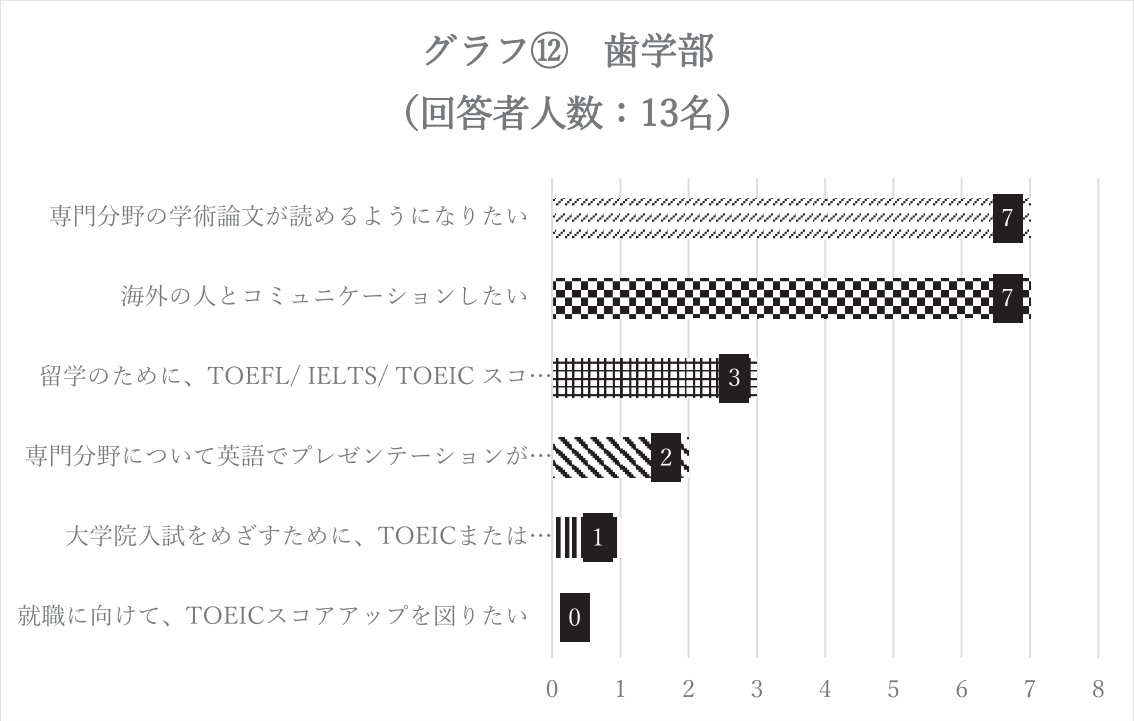


検査技術科学専攻の回答者は 21 名であった。（グラフ⑪参照）まず「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」10 名（48%）が最も多く、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」7 名（33%）「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」4 名（19%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」2 名（10%）であった。看護学専攻や放射線技術科学専攻とは対照的に、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」の回答はいなかった。



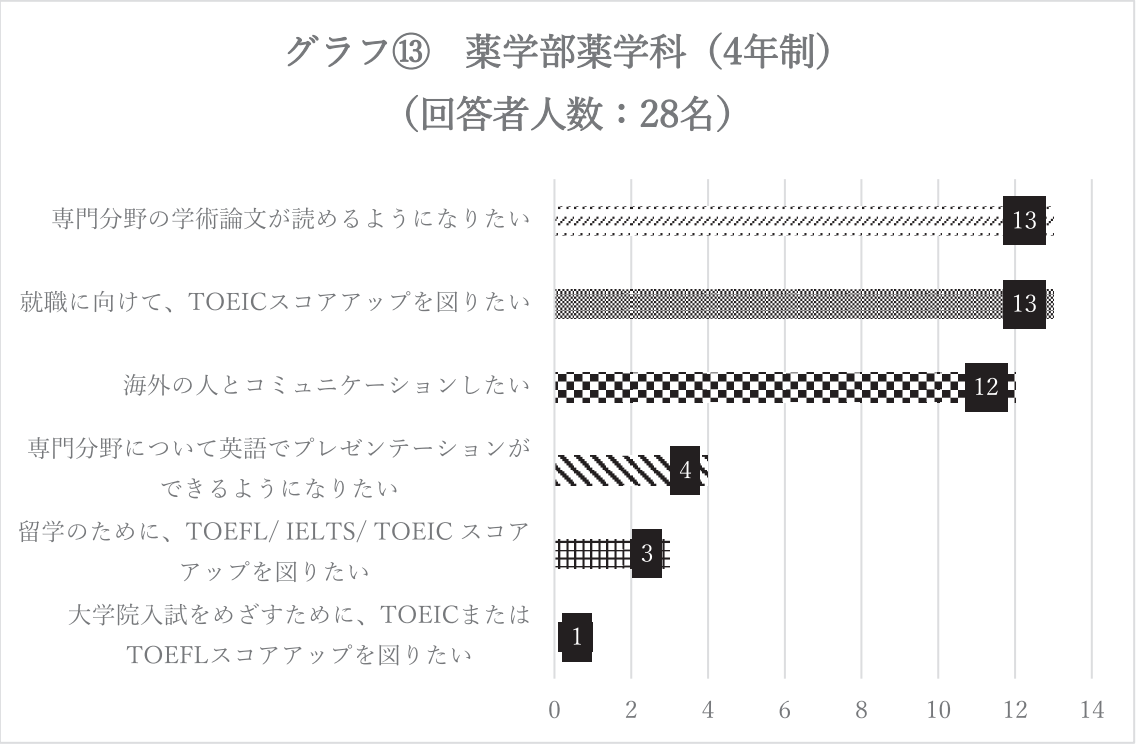
3.2.8　歯学部

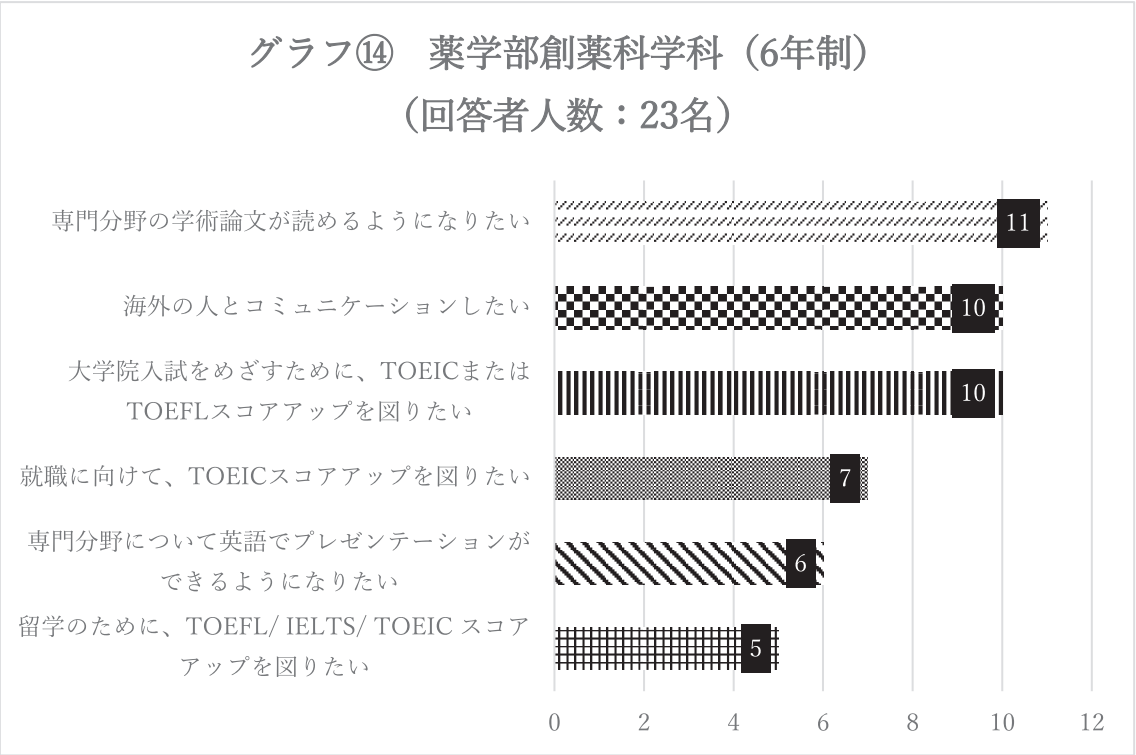
歯学部の回答者は 13 名であった。（グラフ⑫参照）回答者数が少ないのは歯学部の定員が少ないためであり、一定の学部傾向を見ることはできると考える。まず「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」7 名（50%）、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」7 名（50%）の 2 項目が多く、続いて「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」3 名（21%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」1 名（7%）、そして「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」の回答はなかった。これは、全学の傾向とは全く異なる結果であるが、歯学部の学生は、歯科医になるという進路が決定しているためと考えられる。



3.2.9　薬学部

薬学部は、薬学科（4 年制）と創薬科学科（6 年制）に分けて集計を行った。薬学科の回答者は 28 名、創薬科学科の回答者は 23 名であった。（グラフ⑬⑭参照）２つの学科では、ほぼ同じ傾向がみられた。「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」が薬学科 13 名（46%）、創薬科学科 11 名（48%）で最も多い。また「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」薬学科 13 名（46%）、創薬科学科 7 名（30%）の回答者も両学科に共通して多かった。特に、薬学科の回答は医療系の学部学科の中で最も高い。ただし、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」は、薬学科では 0 名に対して、創薬科学科では、10 名（43%）と多く、対照的であった。

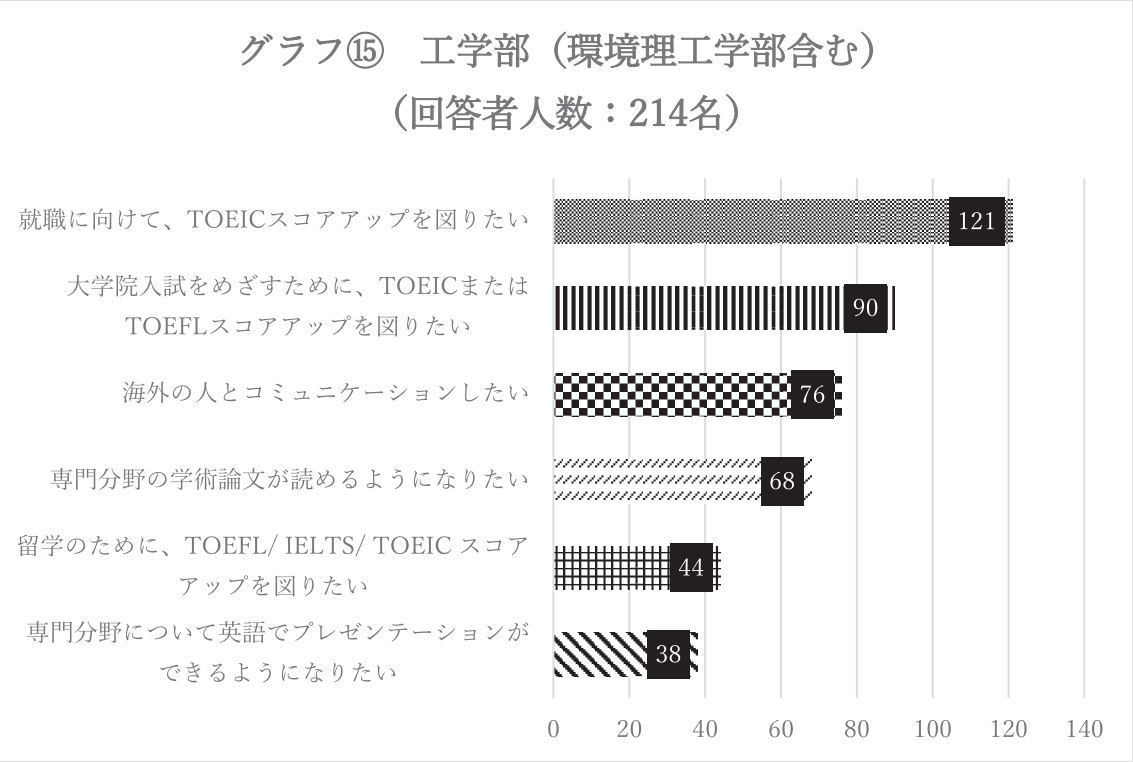




3.2.10　工学部（環境理工学部を含む）[5]

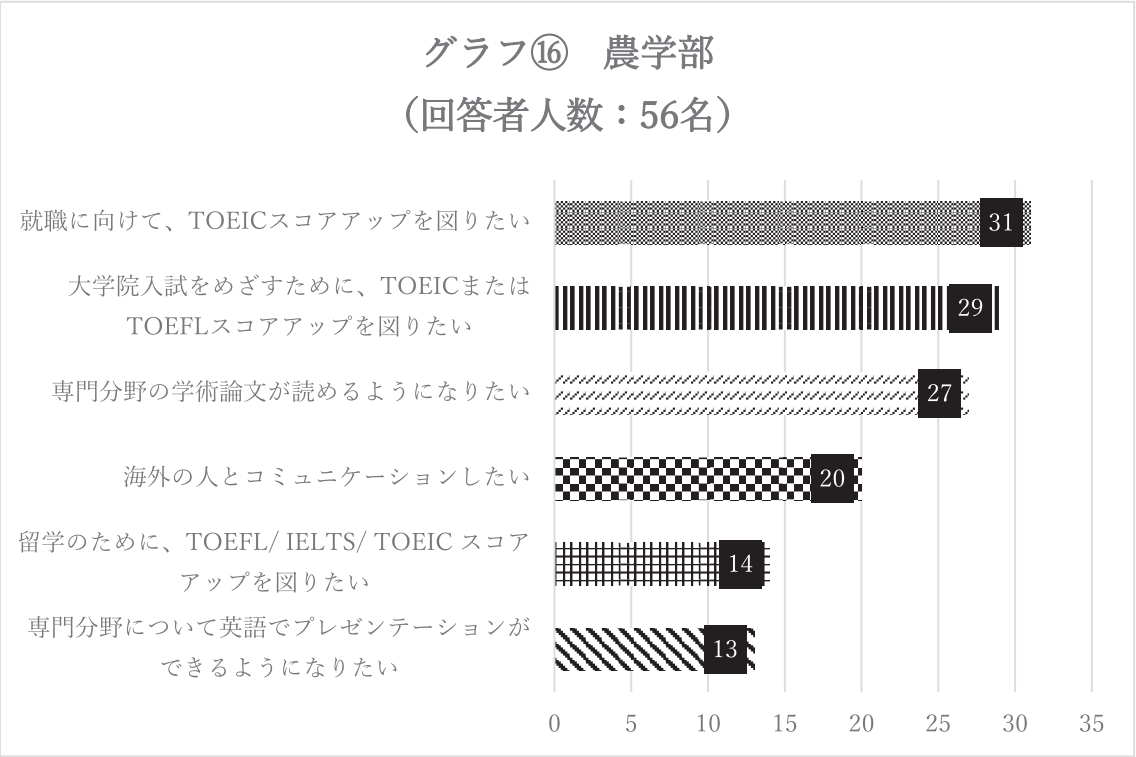
工学部の回答者は 214 名であった（グラフ⑮参照）。まず「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」121 名（57%）が非常に多く、これは理学部、農学部と共通して理系学

部の特徴である。続いて、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」90 名（42%）、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」76 名（36%）、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」68 名（32%）「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」44 名（21%）、「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」38 名（18%）となった。どの項目においても、顕著に低い数値はみられず、全体的に英語学習の動機が高い傾向が見られた。



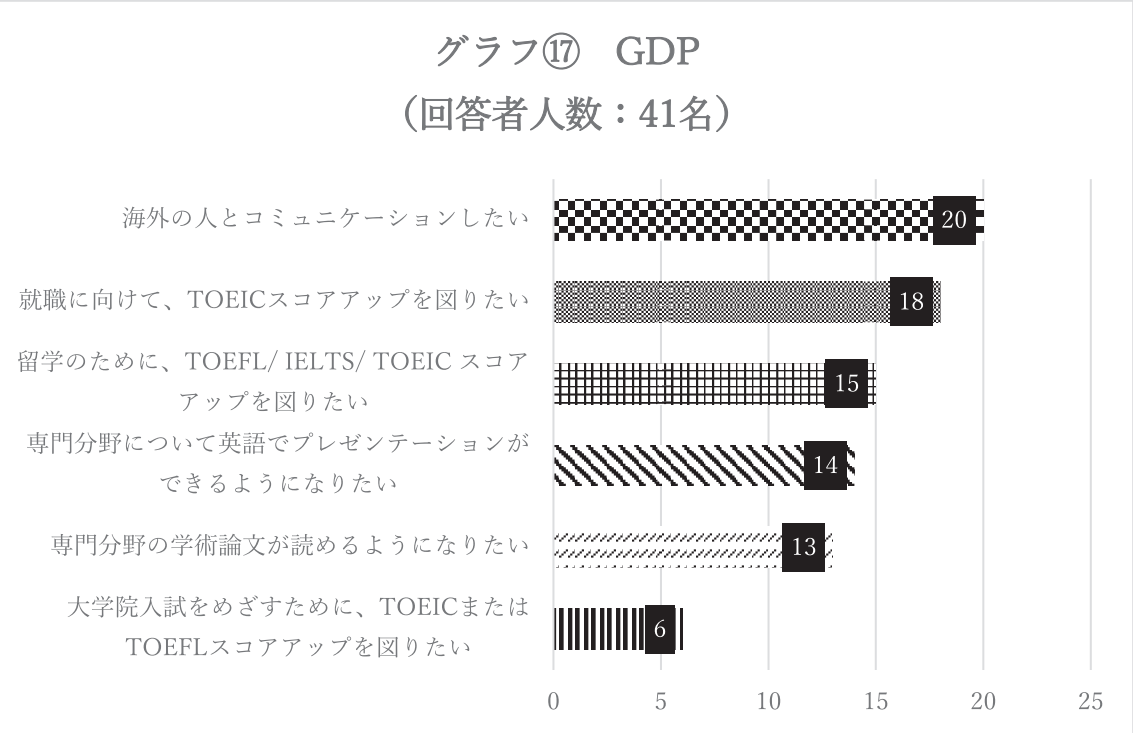
3. 2. 11　農学部

農学部の回答者は 56 名であった。（グラフ⑯参照）農学部は、工学部の傾向と似ている。「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」31 名（55%）、「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」29 名（52%）がどちらも半数を超えて非常に多い。続いて「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」27 名（48%）も半数近い回答があった。「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」20 名（36%）、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」14 名（25%）、「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」13 名（23%）と、どの項目も 20%を超え、全体的に英語学習の動機が高い傾向が見られた。



3.2.12　GDP (Global Discovery Program)

GDP（グローバル・ディスカバリー・プログラム）の回答者は 41 名であった。（グラフ⑰参照）学内においても英語を実際に使用する頻度が日常的に高いと考えられる GDP は、「海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」20 名（49%）が最も多い。続いて、「就職に向けて、TOEIC スコアアップを図りたい」18 名（44%）、「留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい」15 名（37%）が多かった。GDP の特徴として、「専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい」14 名（34%）が、「専門分野の学術論文が読めるようになりたい」13 名（32%）よりも多かった。これは、全学部のうち唯一 GDP において見られた傾向である。また「大学院入試をめざすために、TOEIC または TOEFL スコアアップを図りたい」は 6 名（15%）もいた。



4.　まとめ

本稿では、大学生 904 名の英語学習の動機に関するアンケート調査を報告した。全体としては、就職や進学を考えて英語学習を行うという実用的理由である道具的動機を 7 割近い学生が持っており、一方で、英語でコミュニケーションがしたいという統合的な学習目的を持つ学生が約 4 割、専門分野における英語活用を目的とする学生が 4 割弱いることがわかった。またこれらの動機の傾向は、各学部における細分化された状況によって異なっている。学生自身が主体となる学びが求められている現在、学部ごとの学生が持つ英語学習の理由や目的を把握しつつ、英語科目の設計を行っていくことは言うまでもなく重要である。今後とも、学生の所属する学部学科のコンテクストに応じた学習動機の方向性を把握し、科目設計に活かせることが望まれる。また一方では、どのように大学生の英語学習のやる気を起こさせるのか、といった動機の形成という教育的視点をも含めた検討が重要となってくるであろうと考える。

注

1　近年の英語カリキュラム改革で実施された必修科目群には、平成 25 年度入学生からスタートした「総合英語」、平成 28 年度入学生からの「英語コミュニケーション」、令和元年度入学生からの「英語」がある。

2　全学統一外部試験が継続して実施され、TOEIC-IP のスコアによる経年比較が可能となっている 2014 年度入学生のデータを、大学生の一般的な傾向を見るための参考資料とす

る。2014 年度生は、1 年生 4 月、1 年生 12 月、2 年生 12 月と 3 回にわたって TOEIC-IP 試験を実施した。文末の（参考資料）のグラフ⑱が示しているように、多くの学部において、スコアの平均点は下降している、あるいはかろうじて維持している現状である。詳細は剱持（2016）を参照のこと。

3　外国語学習に関する「道具的動機」と「統合的動機」を対比させる研究がある中、英語のように国際社会における地位が確立されて実用的価値が高い、いわゆる民族言語的バイタリティーの強い言語の場合、この 2 つの区別が明確でなくなる可能性があるとも指摘されている。（八島：2004, p. 64）今回の調査でも、両方の動機に回答した学生は多い。

4　英語でコミュニケーションがしたい、という「統合的動機」を持つ学生は「英語を使う自己像」を心に描くことができており、それに向かって努力するといった「同一化調整」ないしは「統合的調整」というレベルの外発的動機が働いている。（八島：2004, p. 58; Yashima：2009）

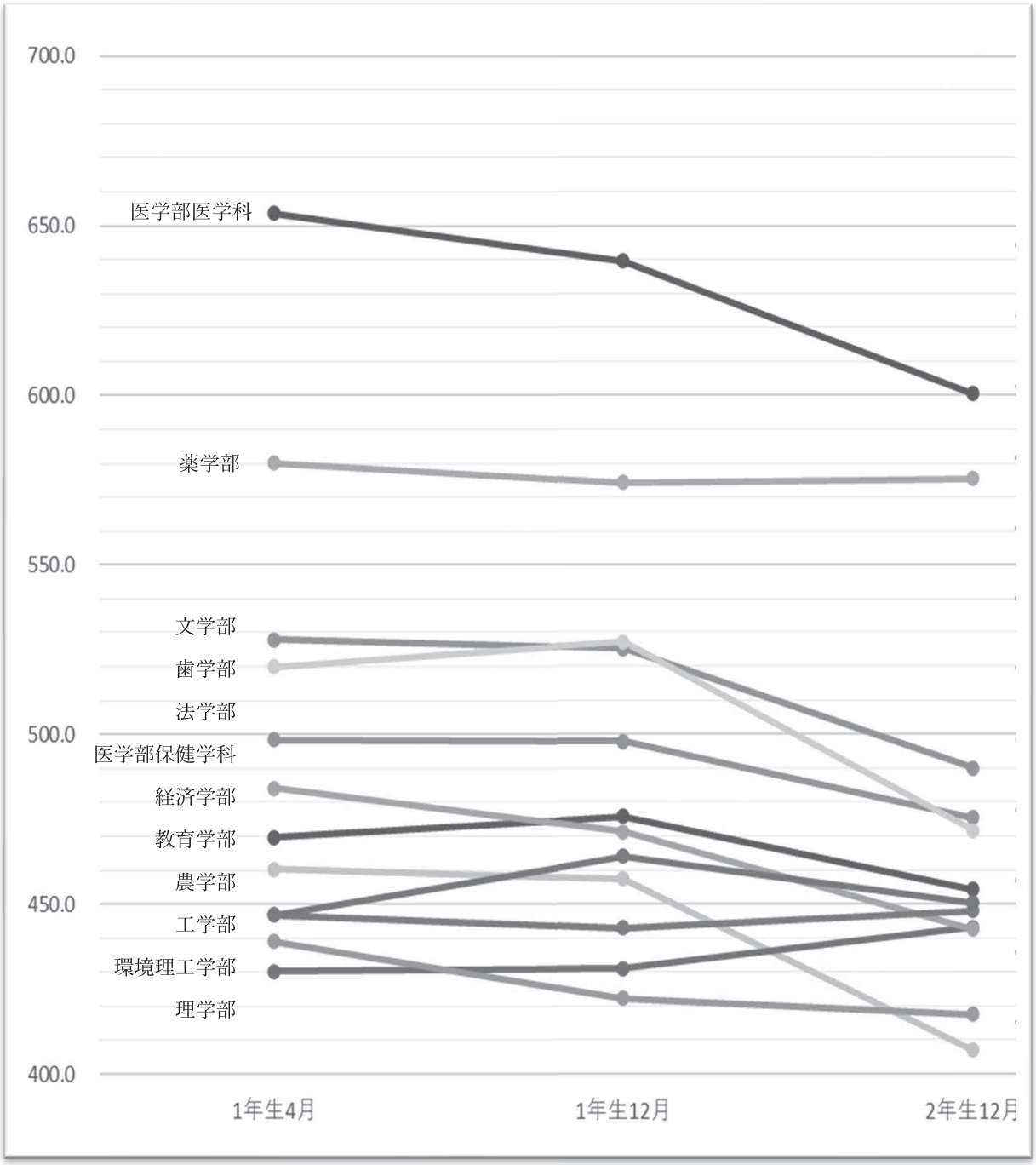
5　環境理工学部は、令和 3 年 4 月より工学部と統合された。

参照文献

剱持淑.（2016）平成 27 年度岡山大学「大学機能強化戦略経費」（教育改革の推進）新英語カリキュラム、グローバル人材育成及び全学統一 TOEIC-IP 実施『岡山大学言語教育センター平成 27 年度年報』pp. 25-46. 岡山大学言語教育センター.

八島智子.（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機–研究と教育の視点–』関西大学出版部.

Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), Motivation, language identity and the L2 self (pp. 144–163). Multilingual Matters.

参考資料：

グラフ⑱ 2014 年度入学生を対象にした TOEIC-IP スコア（平均点）の推移